

『特別』ではない支援をすべての子どもたちに ～授業のユニバーサルデザイン化によるわかりやすい算数学習～

【越谷市教育委員会】

1 学校・学年・教科 小学校・全学年・算数

2 ねらい

平成24年に文部科学省によって実施された調査によると、通常学級の中には発達障害の児童が6.5%いると言われている。そこで、どの学級にも「特別な教育ニーズのある児童」がいることを想定し、「その児童にとって必要な支援は、その他すべての児童にとってもあると便利な支援」という考えのもと、授業のユニバーサルデザイン化をはかることで、すべての子どもたちにわかりやすい授業になるのではないかと考え、本校の研究テーマとした。

3 取組内容

本校では、授業のポイントを「ホップ・ステップ・ジャンプ」というハンドブックにまとめ、全教職員の共通理解として、全教育課程において取り組んできた。このハンドブックにまとめられたものは、「①焦点化 ②共有化 ③複線化（バイパス化）」の3つの柱である。さらに、個別の支援が必要な児童に対しての対応の仕方として「授業で活用できる『支援のポイント集』」をまとめ、個別支援が必要な児童を大きく2タイプに分類し、躓きの要因、支援のポイントを全職員が把握し、授業で取り組んできた。

(1) ハンドブック「ホップ・ステップ・ジャンプ」より

①焦点化～授業をできる限りシンプルに～

主発問の焦点化

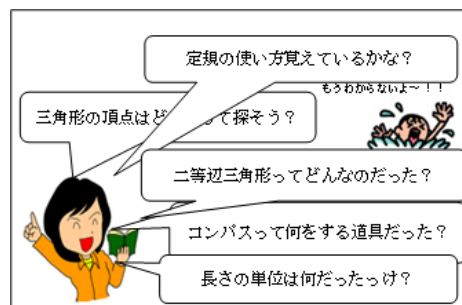
1時間の授業の中で、問うべき主発問を絞り、1発問1指示1動作になるように言葉を精選するように心がける。

児童の思考の焦点化

考えるべきポイントを絞り、解決への見通しを全員がもてるようにする。

学習内容の焦点化

本時で身につけさせたい事を1つに絞り、授業の構成、時間配分、発問の内容を整理する。授業者が身につけさせたいことを明確にすることで、児童にとって「本時で何を学んだか」がわかりやすい授業になる。



②共有化～意図的に作る「困った」と言える場面～

ペア学習やグループ学習等、学び合う場面を意図的に授業内に設定する。自分から支援を求めることで、学習に対する意欲を高めるとともに、成功体験を積み重ねることができる。また、学び合うことで相互理解をしようとする態度を身につけたり、よりわかりやすい説明の仕方を考えたりするなど、学習能力の高い児童にも効果的である。

③複線化（バイパス化）～情報を効果的に児童に届ける手段～

聴覚情報は、情報を得る手段としては、効果が低い。そのため、視覚化を意識した授業の展開、一つの活動に対して視覚・動作・触覚・音声等の複数のルートを用意し、効果的な情報伝達を心がける。

特に、シンプルな教室正面を共通理解とし、黒板周りの情報の精選化を図る。全学年をとおして、黒板で使うチョークの色や掲示するカード、ノートの使い方、発表の仕方の共通化を図り、児童の混乱を避ける。

また、授業時間中に動作を含む活動を必ず入れ、集中力をリフレッシュする時間を意図的に設ける。さらに、多動な児童には、黒板周りの作業を指名したり、配りものを頼んだり、と動きたい欲求を満足させることで、「静かな教室環境」を整える。



(2) 授業で活用できる「支援のポイント集」より

どの教室にもいる「特別な支援が必要な子」の実態に対して、何が原因で、どんな個別の支援を行えばよいかを「支援のポイント集」にまとめた。

例えば「注意を集中し続けることが難しい子」について推測できる躓きの要因は、「刺激が気になり、必要なことが聞き取れない、不必要な情報をカットできない、視覚範囲にないものに注意を払ったり、意識したりすることが難しい」等が考えられる。このような児童に対しては、「支援のポイント集」に示された座席位置の工夫や授業の構成（10～15分単位のユニットによる構成）や掲示物や机上整理の方法などを工夫し、どの職員も的確に支援を行った。

4 成果と課題

【成果】

- ・授業のポイントがはっきりしたため、経験年数に関わらず、授業力が向上し、算数に限らず、全体的に学力が向上した。
- ・適切な支援が受けられるため、教室で不適応になることが少なくなり、不登校児童が減少した。
- ・児童理解が進み、教室の中にいる児童を「できない子」ではなく、「できるようにになりたい子」ととらえることで、教員ができる支援の発想が広がった。

【課題】

- ・授業のユニバーサルデザイン化について表面的な理解では、効果的な授業を展開できないため、職員の入替わりにも対応して、授業者の意識改革が今後も必要である。

